保育者の研修に対して大学と附属が寄与するあり方をめぐって

── 幼児教育未来研究会の実践から考える ──

無藤　隆*　森下葉子**　齋藤久美子***　高濱裕子****

現職保育者の研修に対して大学と附属幼稚園が寄与するあり方をめぐり、幼児教育未来研究会の実践をもとに分析・考察した。第Ⅰ部では、第Ⅱ部のアンケート調査の結果も参照しながら、研究会の成果をとらえ直し、大学や附属幼稚園が現場の保育の改善にどう役立ちうるかを検討した。その要点は、専門性への問い掛けと向上、研修のテーマによる焦点化、理論と実践の組み合わせ、技術的学び、自園への取り入れの難しさ、公的研修とは異なる意義とは何か、国公立幼稚園中心からいかに広げるか、大学・附属園側の気付きであった。第Ⅱ部では、平成17年度における参加者のアンケート結果を分析した。保育の質の向上をめざす熱心な参加者から一定の評価をえられている反面、多様なニーズにいかに対応するか、社会や保育界の変化にいかに対処すべきかといった新たな課題の存在も示唆された。

Ⅰ　幼児教育未来研究会の成果と課題

幼児教育未来研究会は、お茶の水女子大学と東京学芸大学の保育を専門とする大学教員および附属幼稚園の教員が中心となり、さらに、他の関東圏の国立大学法人附属幼稚園また東京都の公立幼稚園関係者、および幾人かの保育の研究者が加わる形で、現場の保育者のための研修を行う組織である。大学や附属が現場の実践の改善への寄与を行うために、自主的に設けた場である。そこでは、一方的に大学側の情報を提供するというのではなく、出来る限り、現場の側との協同の関係を作り出そうと試みている。また、研究会の運営には大学の教員と附属の教員が対等となって、進めてきている。大学や附属の現場への寄与を高め、また公立幼稚園を中心とした現場との連携を行うための場としてきている。以下、第Ⅱ部で分析する研究会の例会でのアンケート調査の結果も参照しつつ、本研究会の成果をとらえ直し、大学や附属が現場の保育の改善にどう役立ちうるかを考察してみたい。

1．専門性への問い掛けと向上

少なくともこのような保育の研修に参加する保育者が自己の専門性を高める熱意が高いことは言うまでもない。だが同時に、その専門性とは何かということへの問い掛けがあるのが特徴なのではないだろうか。この研究会に出たからといって特に「ポイント」になるわけではない。自主研修に過ぎない。それだけ熱意がある保育者・保育研究者が集まっているのだが、それ以上に、保育の専門性とは何か、そこを考えているように思うのである。「保育を見直す」機会とするといったアンケートの回答などにもそういったことが読み取れるのではないだろうか。

個別の課題についての知見を通してさらに保育とは何か、保育者の専門性とは何か、そこで何を目指すべきかということ自体を問うのである。普段、実践に追われている保育者にとって他の視点からの見直しが出来ることにより保育を大きくとらえ直すことが必要だと考えることは、日頃の保育への反省とともに、その保育が狭い対応の世界に閉ざされているのではないかという危惧が背景にあるだろう。保育の基本理念を問い直す機会を得たいということは、とりわけ、大学が主催する研修会に出席する動機の重要なものとなるはずである。

保育の質を高めるということは保育者の大きな願いである。またそこを目指して大学の保育研究も行われ、また附属幼稚園の実践もなされているはずである。その問題意識の交差において、この会が成立している。

キーワード：幼児教育、研究者、大学附属幼稚園、現職教員、教員の資質向上
*　白梅学園大学/お茶の水女子大学客員教授　**　東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科
***　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科　****　お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター

だが、その改善は個別の課題においてなされることであっても、実は大きな視野からの見直しが必要だという点にこの会の試みの貴重な存在価値があるのだと言いたいのである。

2．研修のテーマによる焦点化

保育の全体の見直しが目指されているとしても、同時に、個別の課題を取り上げ、それを巡っての解説と討論が行われる。むしろ、その時々の保育界の新しい課題を導入するための資料が提供され、解説されるのがこの会の特徴である。

課題を取り上げることは実践者にとっては、まさに日々悩んでいたり、あるいは、保育界で問題になっていて、自分の園でも取り入れるなどの対応を迫られているといったことが多い。そこで、直接的にはその対応や解決のための資料やヒントを得たいと願うのはもっともであろう。その上で、こういった課題があることで、議論に焦点が生まれ、実践と結びつける窓が成り立つのである。

ある意味では何の課題であれ、それを取り上げることを通して実践にいつもの保育とは別の光を投げかける。改めて、異なる視点から考えてみる。新たな資料をもらって、課題を発展させて、とらえ直してみる。すると、その課題が糸口となり、その課題を含むところの保育全体の見直しへと向かうことにもなる。

保育の具体的な実践例にせよ、いくらでも実践として挙がってくるものをその課題という観点から検討する。実践のある面が強調され、詳細にとらえられることになる。それは保育の本来の総合性から見ると、偏りのある見方かも知れないが、その角度の新しさが実践の検討にやり直しを可能にするのである。

また、課題を具体化することにより、参加者にとって共通の焦点が生まれ、議論が重なり合い、絡み合うようになる。議論と資料のつながりが生まれ、また理念から見た課題から、その理念が実践において具体化する様子が把握できるのである。

3．理論と実践の組み合わせ

この会では、理論的な考察や資料提供と共に、実践者からの事例の発表があり、その組み合わせにより、理解を深めることを目指している。理屈だけではよく分からないところを実例で確かめる。事例の意味を理論的に明らかにする。

その間の距離は時に近く、時に遠い。必ずしも理論を示す研究者が実践を助言指導しているわけではないので、その対応が高いとは限らない。だが、その場でつきあわせることを通して、研究者が実践の位置づけを深めることも生まれるだろう。また実践側が理論的な言葉を得て、とらえ返すこともある。だが、多くは単純な対応関係ではなく、理論の多様な現れを実践事例が可能にして、いろいろな見え方を具体的に示すことになる。また事例からの理論的読み取りを進める際に理論側の筋道が揺れ動き、多彩なものと変化する。

また、実践に即して、理論の解説を入れることで、実践において理論からの光の投げかけをいかに読み取るかが分かっていく。また逆に実践から理論化するやり方と実例を知ることにもなる。

研究者にとっても理論的な解説を事例により裏付けられると共に、実践での細かい事情を理解することが出来、理論と実践現場をつなぐ際の要領や留意点をつかむことが出来る。実践者にとっては理論的な枠組みがいかなるものであり、自らの実践をそれがいかに包括するのかが見えてくる。その両方の見え方の進展は、参加している側にとってある時には理論側の立場で実践を意味づけ、ある時は実践側の見方で理論を展開することになる。

4．技術的学び

保育について学ぶとき、特に実践者でも初心の人とか、中堅クラスでも、実技や技術での改善の手だてとか、すぐに使えるような実用的なこつを得たいと思う。本研究会はそういった狙いではないので、実技を求める声は多くないが、しかし、役立つ助言を求め、園に戻り、すぐにでも改善が出来る示唆をほしいとかなりの参加者が思っている。

それを無視することは現実的でない。そもそも管理職以外の多くの保育者が研修に参加しなくなるだろう。実践者である以上、すぐに役立ち、自分の保育に生かせる助言がほしいのは当然だ。

だが、それ以上に技術的実用的な学びを研修の中に含み込むことの意味がある。保育というものが身体的技能を核として、対象への具体的な操作や働きかけを行うものであることはその大事な特徴である。理屈もさることながら、それだけで動くわけではない。また言葉のやりとりだけで保育が進むわけでもない。保育の中で技術の部分は本質的にその構成要素なのである。

いかなる理論もまた実践報告も、個別の保育行為における実技のあり方や進め方に示唆を与えない限り、実践に生きたものになる経路が見いだせない。それは

各実践者に任せるべきことでもあるのだろうが、しかしある程度は、実技や技術や教材のあり方にどうつながるかの例を示されないと、その応用もどのように進めればよいのかが見当がつかない。

実技講習そのものをするべきだというのではない。全くの初心者や学生を相手の研修とは異なり、参加者はある程度の保育経験を持っている人が大部分である。多少の実技が関わる例を見せられれば、それを自分の場合に適用するだけの経験を積んでいることだろう。

5．自園への取り入れの難しさ

理論としては理解できる、また実践としてのすばらしさも分かる、しかし自分のところには取り入れにくい。事情が異なる上に、いろいろな障害がある。このように感想をもらす保育者が少なくない。

それは研修として学ぶことが一般論であったり、理想であり、また実践も好条件が整っていたり、力量のある保育者が行うものであったりするので、当然ではある。それらを目指すべきもの、またそれとの比較で実践をとらえなおし、改善の方向を示唆するものとして機能させるということが研修での重要な目的である。

その上で、モデルとなるものを与えられたところで、それを創造的に適用しようとする意欲がかき立てられる必要がある。何よりいかなる実践現場も困難に満ちており、易々と優れた実践を実現できたところなどはないのである。そのことを分かってもらうために、実現への困難であった過程とそこでその一つ一つの障害をいかにして乗り越えてきたかを語ることが大事になる。また障害の乗り越えの工夫の仕方やその多様な手だてを多く提示することに気を配るべきでもある。

またすべてがうまくいっているわけではないのだということも示すことに意味がある。あきらめているわけではないが、といって、何もかもが理想的に進むわけではない。困難が多々ある中で、そのあるものをむしろ生かし、また別なものは自分の側に引き入れてプラスの働きに変えていく。そういった揺れ動きに満ちているのが現場である。

単に難しさを見せて、どこも大変だと同情的共感を互いに示すだけでは意味がない。愚痴の言い合いになっても仕方がない。あくまで改善のためのヒントが得られ、それを元に自分たちが自分の現場で工夫しようとする努力が生まれるようにすることが肝腎である。その励ましは他の場で困難に立ち向かう実践者の姿と、またそこでの理論的支柱を提供しようとする研究者の志向により可能となるのである。

6．公的研修とは異なる意義とは何か

本研究会は誰にも開かれたものであると同時に、特に何かの公的なポイントになるといったものではない。おそらくほとんどの人は自己研修として参加しているに違いない。貴重な時間を費やして何かを得ようとしているのである。

おそらく日々の保育の活動の中で、また時に保育を振り返る中で、また世間での動向にふと目が向く折りなどに、知りたいことが出てくるのに違いない。それはまた、保育界全体にとって重要であろうと考えているのではないだろうか。だからこそ、こういった会で情報を得ようとする。保育界や学界などでの知見から参考になるものがあるだろうと考える。

それは同時に、各々の保育者の専門性の形成の過程における学びでもあるだろう。初心者からベテランまで、また退職者を含めて、各々が日頃からの自らの学びたい課題を持っている。また漠然とした停滞感や行き詰まり感があり、それを打開したいと願うこともある。そういった折りの刺激として会に参加する場合もあるだろう。具体的にこういう課題について学びたいと思い、そのテーマがたまたま開かれることを知って、聴講に来る場合もある。

その意味では、生涯学習の場であり、また専門性の向上の機会でもある。そういった各々の学びの過程がこの会の場で交錯し、情報と解説を提供する側の課題意識と触れる点があるのなら、おそらくこの会は成功と言えることになる。その意味では、保育者が実践の場でまた専門家として向上したいと願うところで何を学ぼうとしているかの潜在的な求めを主催側は感じ取る必要がある。

7．国公立幼稚園中心からいかに広げるか

研究会の主催側の課題設定や問題意識がどこまでをカバーしているかの制約は特にその母体が国公立の幼稚園にあるだけに大きいのかも知れない。私立幼稚園や公私立の保育所を含めて、日本の幼児教育全体を視野に入れることが可能になるにもかかわらず、うまくそこで実践を重ねている保育者が日頃から感じている問題の設定とうまく触れ合うことが出来ていないのかも知れない。

確かに、国公立幼稚園が幼児教育の基本となるべき理念やその具体化としての実践を形成してきたという

自負を持ってよいと思われるし、それが他のところでのモデルともなりうるだろう。また、取り上げる課題自体はおそらく日本のどこの地域の幼稚園でも保育所でも遅かれ早かれ問題となるはずのことでもある。さらに、仮に例えば私立幼稚園にとって参考にならない点があるとしても、それは例えば、若い保育者が多すぎるといった限界によるとしたら、必ずしもそれを十分に尊重して課題設定をすることが本研究会の目指すところとは限らない。

だが、例えば、幼稚園が預かり保育その他で次第に保育所の要素を取り入れつつあり、また保育所は幼児教育の働きを強化し始めている中で、もっと幼保のつながりに配慮してもよさそうだ。さらに、公立より私立幼稚園こそが日本の幼稚園教育全体の多くを担っているのだから、そこで必要なことは何かをもっと正面切って検討することは必要であるはずである。また幼保・公私という交流を活発にすることが研究会のあり方として今後特に重要となるに違いない。

8．大学・附属園側の気付き

研修の場を作っていくことはあるいは主催側により多くの学びを可能にしているのかも知れない。どのような課題なら多くの人の関心を引くのだろうか。そもそも現在の保育界で何が問題であるのだろうか。普遍的な問題とその時々の課題との重なりとしてそれをとらえるとしたら、いったいどのようなことがふさわしいのか。行政の研修ではあまり行わないようなことは何か。

また大学や附属園側で提供できることは何があるかも考えざるを得ない。外部講師を招くことも多いが、それにしても、多くは何か主催側と何かの接点を持っている人をお願いしている。また研究にしても実践にしても、各々の大学が提供できることがあるなら、是非出したいと考えている。

主催側の準備のために多くの大学・附属園の教員が参加するのだから、当然、そこで研修について共に学ぶことにもなる。それを通してかなりの視野の広がりを得てきたように思う。

大学と附属園の協力の機会ともなっている。本来、一緒に連携しつつ考える二つの場であるにもかかわらず、実際にはなかなか接点を見いだしにくい。研修を共に計画し進めることが具体的な共同の場となっている。

何より、今の保育界全体で何が起きているのか、そこで何にとまどい、何に困っているのかについて敏感になってきたようである。そこでの課題は何かを想像し、知り合いなどを通して尋ね、また参加者からの感想からとらえ直すのである。

国立大学やその附属幼稚園が全国の公私の幼稚園・保育所に役立つような研究や実践を進めるべきであるとよく指摘される。その具体的な貢献の機会として本研究会が少しでも機能していると言ってよいのであろう。

Ⅱ　幼児教育未来研究会アンケート集計結果

1．調査の目的

調査の目的は幼児教育未来研究会に対する参加者の参加動機、満足度や要望などを明らかにすることを通して研究会の評価をおこなうこと、さらに参加者にどのような気づきや学びが生まれたのかを調査し、本研究会の意義や今後の課題などを検証すること（無藤・岩立・西坂・高濱、2006）である。平成17年度の幼児教育未来研究会の実施一覧をTable 1に示した。

2．調査方法及び分析方法

アンケートは、各例会の受付時に当日の資料とともに参加者全員に配布された。そして研究会終了時に記入を求め、その場で回収した。調査項目はTable 2に示した通りである。

本研究会は、事例発表とそれへの助言というスタイルでおこなわれる例会と、講演やシンポジウム、実技研修などで構成される夏のスペシャル研修会とからなる。基本的には両者を区別せずに分析をおこなう。

3．調査の結果

(1)　参加者数及びアンケート回答者の属性について

各回の参加者数、アンケート回収率、アンケート回答者の平均年齢などをTable 3に、アンケート回答者の属性をTable 4に示した。なお本研究会には運営に携わる主催者や運営委員、大学院生などが毎回20～30名程度参加しているが、これは参加人数には含めていない。

夏のスペシャル研究会を除くと、例会における平均出席者数は38.4名であった。前年度（平成16年度）の平均出席者数は47.3名であったから、数値の上では減少したことになる。しかし、現職教員を対象とする研究会ならではの事情を考慮する必要があろう。出席者が他の例会に比較して極端に少ない第４回と第５回は、幼稚園や保育所の秋の行事との日程重複があった

Table 1　平成17年度　幼児教育未来研究会のテーマ及び事例提供者、講師

第１回	2005年４月23日（土）10:00～12:00　場所　お茶の水女子大学附属幼稚園 テーマ「外部評価」 事例提供　岡上直子（練馬区立光が丘さくら幼稚園園長） 助言　　神長美津子（東京成徳大学助教授）
第２回	2005年５月28日（土）10:00～12:00　場所　お茶の水女子大学附属幼稚園 テーマ「特別支援」 事例提供　佐藤幸子（世田谷区立給田幼稚園教諭） 助言　　大伴潔（東京学芸大学教授）
第３回	2005年６月18日（土）10:00～12:00　場所　東京学芸大学附属竹早小学校 テーマ「保育カウンセラーの役割」 事例提供　村上とも子（文京区立明化幼稚園長） 助言　　岩立京子（東京学芸大学教授）
夏のスペシャル研修会	2005年８月20日（土）10:00～16:00　場所　東京学芸大学芸術館ホール シンポジウム「幼児教育の行方：変わりゆくものと永遠のもの」 話題提供　高柳恭子（宇都宮大学教育学部附属幼稚園副園長） 田中雅道（京都市光明幼稚園園長） 無藤隆（白梅学園大学学長） 司会　　高濱裕子（お茶の水女子大学教授） ビデオ上映会「３年間の保育記録」 解説　赤石元子（東京学芸大学附属幼稚園副園長） 実践交流会「幼保の総合化に向けて」 話題提供　藤原和子（千代田区立いずみ子ども園園長） 五十嵐俊子（日野市教育委員会指導主事） 倉本智恵子（日野市立第七幼稚園園長） 司会　　福元真由美（東京学芸大学助教授）
第４回	2005年９月17日（土）10:00～12:00　場所　東京学芸大学附属竹早小学校 テーマ「いのちの教育」 事例提供　井口眞美（東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎） 助言　　中川美穂子（学校飼育動物研究会事務局長）
第５回	2005年10月15日（土）10:00～12:00　場所　東京学芸大学附属竹早小学校 テーマ「安全と危機管理」 事例提供　原本憲子（江東区立なでしこ幼稚園園長） 助言　　渡辺正樹（東京学芸大学教授）
第６回	2005年12月17日（土）10:00～12:00　場所　お茶の水女子大学附属幼稚園 テーマ「生後８年間のカリキュラム」 事例提供　大竹節子（品川区立二葉すこやか園園長） 助言　　無藤隆（白梅学園大学学長）
第７回	2006年１月28日（土）10:00～12:00　場所　お茶の水女子大学附属幼稚園 テーマ「教育評価」 事例提供　高橋陽子（お茶の水女子大学附属幼稚園教諭） 助言　　河邉貴子（立教女学院短期大学助教授）
第８回	2006年２月18日（土）10:00～12:00　場所　お茶の水女子大学附属幼稚園 テーマ「協同的遊び」 事例提供　亀井彩・中野圭祐（東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎教諭） 講師　　秋田喜代美（東京大学教授）

Table 2　アンケートの内容

①　年齢 ②　保育者経験年数（保育経験のある者のみ記入） ③　所属（私立幼稚園，公立幼稚園，国立大学法人附属幼稚園，私立保育園，公立保育園，大学学部生，大学院生，専門学校・大学の教員，教育委員会，民間会社，その他） ④　研究会への参加動機（７項目から複数回答） ⑤　本日の研究会に対する満足度（「満足しなかった」から「とても満足した」までの５段階評価） ⑥　研究会に参加して新たに気づいたこと，学んだこと（自由記述） ⑦　研究会に対するコメント（自由記述） ⑧　今後，この研究会で取りあげてほしいテーマ（自由記述） ⑨　研究会の運営について改善点（自由記述）

Table 3　各回の参加者数，アンケート回収率，回答者の年齢と保育経験年数

	参加者数	回収率	平均年齢（幅）	平均経験年数[注1]（幅）
第１回［外部評価］	34	44.1	設問なし	23.3(7－36)
第２回［特別支援］	38	66.0	36.6(32－55)	16.2(2－37)
第３回［保育カウンセラーの役割］	48	31.3	32.4(19－57)	18.6(1－37)
第４回［いのちの教育］	15	20.0	28.3(26－32)	7.0(5－ 8)
第５回［安全と危機管理］	14	42.9	46.5(32－55)	25.6(5－35)
第６回［生後８年間のカリキュラム］	41	34.1	35.6(23－58)	13.5(1－38)
第７回［教育評価］	41	41.5	52.3(36－59)	31.0(14－35)
第８回［協同的遊び］	76	11.8	38.3(23－58)	8.6(1－30)
夏のスペシャル研修会［幼児教育の未来を創る］	67	35.8	設問なし	設問なし

注1）保育経験のある者のみを対象に平均値を算出した。

Table 4　回答者の所属　（単位：名）

	私立幼稚園	公立幼稚園	独立行政法人附属幼稚園	私立保育園	公立保育園	大学学部生	大学院生	専門学校・大学の教員	教育委員会	民間会社	その他	無回答
第１回［４月］	1	6	4	0	0	0	0	2	1	0	1	0
第２回［５月］	2	9	0	0	1	4	2	1	1	1	3	1
第３回［６月］	2	5	1	0	1	3	1	0	1	0	0	0
第４回［９月］	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第５回［10月］	1	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第６回［12月］	3	3	0	2	1	0	0	2	0	1	1	1
第７回［１月］	3	12	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0
第８回［２月］	2	1	0	0	0	0	1	0	2	0	3	0
合計	16	41	6	2	3	7	5	5	5	2	9	2

ことが指摘された。すなわち９月及び10月は、遠足や運動会などの行事が天候の状況をみながら実施される。例会の開催された両日は非常によい天気で、各園の行事がつつがなく実施されたようだ。本研究会では資料準備の都合もあって、事前に例会への参加申し込みを受けつけるが、その申し込み人数自体は他の例会と差がなかった。したがって、当日参加可能かどうかはわからないが、とりあえず申し込んだ者が多かったと推測される。今後は、園の年間行事予定なども考慮しつつ本研究会の年間計画を立案することが必要だろう。

上記の２回を除いて、例会へはほぼコンスタントに40名前後が参加している。またテーマや助言者によっては、参加者数が増加する傾向がみられた。なお、アンケートの平均回収率は、夏のスペシャル研修会を含めて36.4％であった。

回答者の年齢幅は多数の大学学部生が参加した第３回と回答者数が少ない第４回を除いてほぼ毎回、25歳前後から50代後半であった。ここには保育者以外の職業の参加者も含まれるが、以下は保育者にのみ尋ねた結果である。

回答者の経験年数をみると、ほぼ毎回、１年目の新任保育者から30数年のベテラン保育者まで幅広い経験層の保育者が参加していた。

また、回答者の多くは公立・私立幼稚園に所属する教員で、保育士は少なかった。本研究会の参加者の多くは幼稚園教員であり、実際の参加者数を反映した結果といえるだろう。「生後８年間のカリキュラム（第６回）」のように幼保連携に関わるテーマがとりあげられた例会には、公立・私立保育所合わせて３名の保育士から回答がえられた。幼稚園教員以外の参加者は、興味・関心のあるテーマを選んで参加していることが推測される。

(2)　参加動機について

研究会への参加動機について、「本日のテーマに興味があったから」、「本日の助言者の話が聞きたかったから」、「本日の事例に興味があったから」、「幼児教育未来研究会の趣旨に興味があったから」、「保育について勉強したかったから」、「保育を見直すよい機会だと

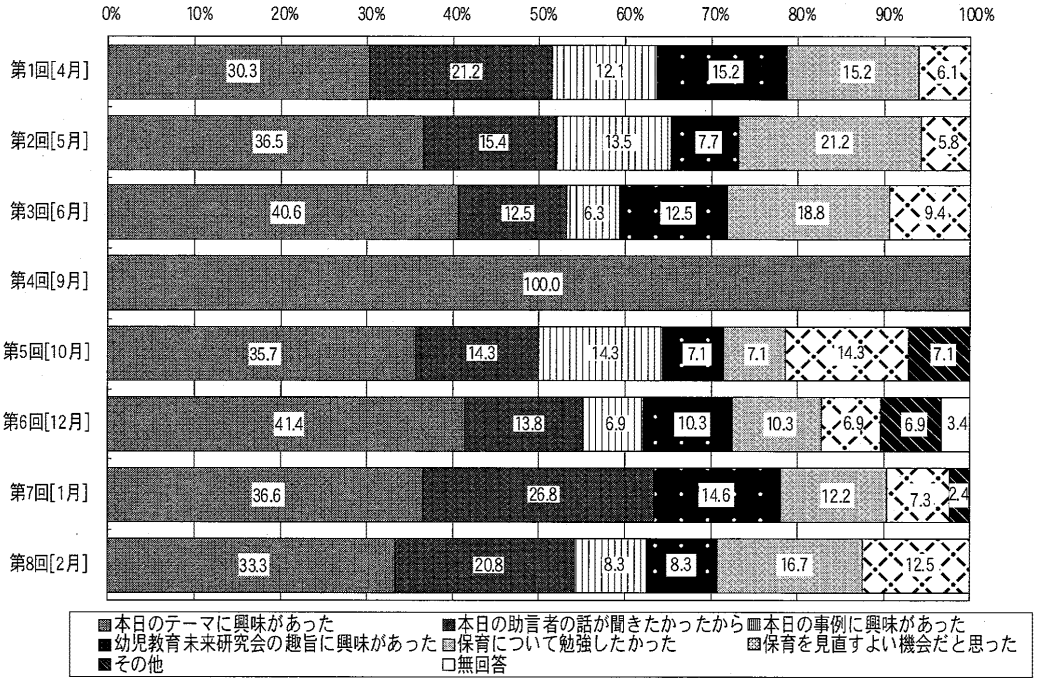

Figure 1　研究会への参加動機（複数回答）

思ったから」、「その他」、のうち当てはまるもの全てを選択するよう求めた。各回の参加動機をFigure 1にまとめた。

いずれの例会でも「本日のテーマに興味があった」が最も多く、「本日の助言者の話が聞きたかった」や「本日の事例に興味があった」が続いている。「保育について勉強したかった」や「保育を見直すよい機会だと思った」のような保育に関わる動機も、第4回を除いて2割から3割程度を占めている。また、「幼児教育未来研究会の趣旨に興味があった」と回答した割合も毎回全体の7％～15％を占めていた。「その他」には、「研究会の研究テーマでありぜひ勉強したかった（第5回）」、「知人からの紹介（第6回）」、「自分の子どもはもちろんのこと、子どもに接する時も幼児教育の勉強をふまえて接することができたらと思ったから（第7回）」という記述が見られた。

(3)　満足度について

例会に対する満足度について、「満足しなかった」から「とても満足した」の5段階評価を求めた結果をFigure 2に示した。

いずれの例会でも「とても満足した」「少し満足した」と回答した人の割合が全体の8割を超えており、高い満足度がえられていることがわかる。特に、第2回「特別支援」と第8回「協同的遊び」では7割から8割の参加者が「とても満足した」と回答した。一方、「満足しない」「少し満足しない」「どちらでもない」と回答した人の自由記述欄には、研究会の時間配分や資料についての意見があったことから、テーマや内容ではなく、会の運営に対する不満が満足度に反映したことが推測される。

(4)　定例研究会の意義について

定例会研究会の意義については、自由記述の「研究会に参加して新たに気づいたことや学んだこと」および「本日の研究会についてのコメント」に対する回答を中心に考察する。

第1回の「外部評価」では、外部評価の重要性が理解できたという意見や、日常の保育を見直し改善することを学んだという意見があげられた。（自園の）評価項目の具体例として参考になったという意見もあった。

必要性が認識されながらも現実には実施率の低い「外部評価」について、事例提供では実際に学校評議員制度を活用した実践について資料をあげて紹介され、助言者からは自己評価との関係や日常的な保育活動の中に評価を位置づけ、日常の保育に還元していくことが提言された。これらにより、参加者にとってまだ馴染みの薄いであろう「外部評価」について、実践と結びつけて意義を理解し、実現可能性を感じる助けとなったのではないか。

第2回の「特別支援」では、事例提供の発表がさら

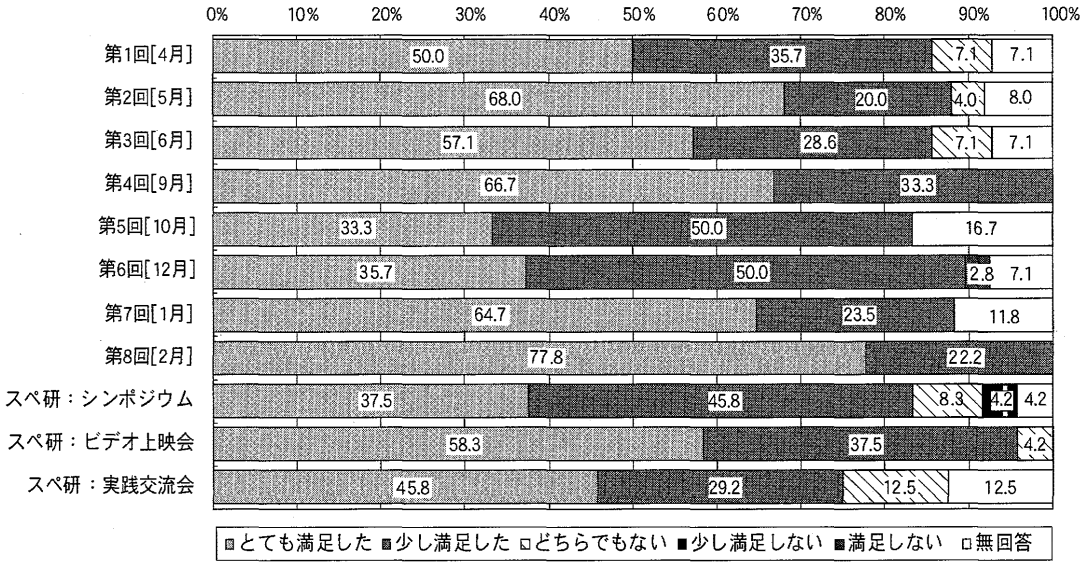

Figure 2　研究会に対する満足度

に整理されるとよりよかったとの意見がある一方で、日々の様子がよくわかり自園の様子と重ねて聞くことができた、保育者の奮闘を共感して聞くことができた、励みになったという感想があった。助言については、子どもの困った行動を子どものとまどいの反映として解釈するという視点や、具体的な対応など、参考になったという意見が多くよせられた。

事例提供では、子どもたちの様子、具体的な手だて、保護者との関係、悩んだ経験などが事例を通して豊かに語られ、助言では様々な発達障害児の世界観と具体的な援助が示された。参加者が日々直面している問題について、明日への活力と発達障害の専門的知識をえる機会を提供したと考えられる。

第3回の「保育カウンセラーの役割」では、保育カウンセラーの役割や制度について深く理解することができたこと、また、保育者の専門性を改めて認識できたこと、保育者と保育カウンセラーがそれぞれの専門性を活かして協働する重要性を感じたという記述があった。また、複数の専門性を通して子どもを見るという観点から、保育所の看護士や栄養士の役割と重ねて聞いたというコメントもあった。

事例の中では文京区の子育て支援カウンセラー派遣事業の制度や保育現場での実際の取り組みの様子などが具体的に説明され、助言では保育者がカウンセラーに教えを請うだけではなく、主体的に関わり専門性を発揮する姿勢や、異分野が協働して子どもを総合的に理解することの重要性が示された。このことから、参加者は新しい「保育カウンセラー」制度についての理解を深めながら、保育者としての自身の専門性を振り返るきっかけともなったのではないかと考えられる。

第4回の「いのちの教育」では、動物という存在の教育力について改めて見直すよい機会となった、命について考えさせられた、「共生」ということを学んだなどの記述があった。他に、子どもの動物への乱暴な接し方に悩んでいたが、子どもたちがどのように育っていってほしいか考え接していきたいと思った、小学校の実践を聞けたのがよかったなどの意見もよせられた。

この回は幼稚園での当番制による飼育、小学校の教室内での飼育という異なる2つの事例の紹介と、獣医師が具体的な飼育方法や注意点をあげるという構成で行われた。参加者にとって、多様かつ適切な飼育方法に触れる機会となり、園で飼育しているものの普段はその意義が見過ごされがちである動物を通した経験について、改めて見直す機会となったと考えられる。

第5回の「安全と危機管理」では、危機管理意識を持つことの大切さが改めて身に沁みた、自園での危機管理体制について考えるよい機会となった、自園でできることを見直していきたい、事例園での対策や工夫を自園で取り入れたいという意見があげられた。加えてこの回の参加者の少なさが、危機意識の低さを物語っているという厳しい意見もあった。

おそらく現場では危機管理の重要性を感じていながらも、実感が伴わない、日々の保育の中での時間やノウハウが十分ではないなどの理由から危機管理体制の整備が進まないのが現状と思われる。例会では、常に園環境を見直し訓練を重ねているという緊張感のある事例の報告や、日米の最新の情報を交えた具体的な助

言がなされたことから、参加者は危機を身近なものとして感じ、自園を見直し具体的な対策に取り組む方向性を見出すきっかけになったのではないかと考えられる。

第6回の「生後8年間のカリキュラム」では、幼稚園と保育所の文化の違いから工夫して問題を乗り越えていく過程が聞けてよかった、幼保複合型施設独自の時間や空間、環境の捉え方、カリキュラムの内容などの工夫が勉強になった、カリキュラム作りの参考になったなどの記述があった。

この回は、幼稚園教諭、保育士の各代表者から、両者の交流・環境構成を軸に事例報告があり、助言では生後8年間を捉える際の観点が複数にわたって示され、参加者は幼稚園と保育所の連携の実際と、その必要な視点を学ぶことができたのではないかと考えられる。

第7回の「教育評価」では、評価と子どもの日々の姿との結びつきに気づいた、幼児理解と保育の方向性（教師の願い、計画）に立脚していくことを改めて大切にしたいと考えた、保育者の仕事の楽しさを実感できたという肯定的なコメントが目立った一方、実践での難しさを改めて感じるという意見もあった。

事例報告は活動のプロセスの中での評価という観点からなされ、助言では、子どもの育ち、指導の観点から複数のポイントが示された。なじみがないという記述もあった「評価」について、参加者には保育に活かすための評価ということを改めて認識する機会となったのではないか。

第8回の「協同的遊び」では、事例の援助を自分の援助にも取り入れてみたい、保育を丁寧に見直すことの大切さを痛感した、普段の自分の働きかけの子どもへの影響を考えながら聞くことがでた、助言者の分析的視点は実際の保育を見るときの観点として今後の保育に活かしたいという意見があげられた。

実践の具体的なビデオ映像が見られたことと、映像について実践者と助言者による各立場からの細やかな解説と分析がえられたことが参加者に深い理解を促したと考えられる。事例提供と助言からはビデオ映像に写らない、日々の積み重ねの部分に思いをはせ、子どもたちや教師の何気ない動きを見直す視点をえる助けとなったのではないかと考えられる。

夏のスペシャル研修会「幼児教育の未来を創る」は3部構成で、シンポジウムでは3名の発表者から幼児教育の現状について語られ、ビデオ上映では対象園の副園長から解説が加えられ、実践交流では2つの総合施設から各園の実践の報告が行われた。

3部については、それぞれ、幼児教育の現状を知ることができた、ビデオから子どもの葛藤経験の保障と教師の援助について考えさせられた、幼保連携の問題点や実際について理解できたなどの記述があった。加えて、日々の積み重ねが大事であることを改めて感じた、自分の視野や見解を広めるのに役立った、一人一人育ちを確実にとらえて記録し、教師間で共有し、子どもの育ちを保護者や地域に伝えていくことの重要性を感じた、カリキュラム作成に当たり勉強になったなどのコメントがよせられた。一方で、開かれた研修で

Table 5　今後この研究会に望むテーマ

テーマ内容	コメント数
子育て支援	5
教育課程，就学前教育・保育全般，幼児教育の現状・課題・施策	4
幼小連携，幼保連携	3
家庭教育，5歳児の保育，評価	2
その他 絵本の生かし方，教員の資質向上に向けて，きょうだいへの配慮，気になる子，食育，私立で働く保育士の労働条件，担任との関わり・保育経験の子どもへの影響，特別支援教育，幼児の発達	9

Table 6　会の運営や開催形式に対する改善点

コメント内容	コメント数
時間配分 （時間が短い・時間配分を適切にして欲しい，参加者に発言の機会が欲しい）	7
発表環境 （発表環境の改善，発表内容の改善，座席に机が欲しい）	3
その他 （会場への順路・案内が欲しい，申し込み方法・公報の改善）	2

あるのに附属幼稚園が主導するという発表に違和感を覚えた、もっと（管理職だけでなく）保育実践者に役立つものもあるとよかったなどの批判的な意見もよせられた。

以上、自由記述から研究会の意義を検討した。新たな理解や認識、意欲などをえられたという肯定的な意見が目立つ一方で、実際に自分の実践や自園での実践で取り組む際には難しさを覚えるという意見もあった。

例えば、臨床心理士に相談したいが難しい（6月「保育カウンセラーの役割」）、現場レベルでは何をしたらよいのかわからない（8月「夏のスペシャル研修会」）と自園での実践に困難を感じるという意見、（園長という）運営側からの視点だったので教師個人が実践に活かしていくのは難しい（4月「外部評価」）という個人で取り組む難しさ、私立園では外部評価は競争に関係するので実施に困難がある（4月「外部評価」）という私立幼稚園の事情、長時間保育や小学校と管轄が異なるなどの保育所特有の課題（5月「特別支援」）、環境がそれぞれの幼稚園で異なり東京都と他では大きな相違がある、教育委員会や行政の協力をどのようにえるかに迷う（10月「安全と危機管理」）という地域による状況の違いなどがあげられた。

研究会が役立つという意見がある一方で、これらの意見は研究会のテーマや構成が、都市部の、公立幼稚園の、管理職の観点に偏っているという批判と受け取ることもできよう。

(5) 課題及び改善点について

この研究会に望むテーマとしてあげられた内容を整理してTable 5に示した。希望するテーマとしてあげられた合計38件中、子育て支援、教育課程、幼小連携、幼保連携、評価など9テーマの24件（約63%）は、これまでの研究会において扱われたテーマであった。こうした結果は、研究会が参加者の求める現在的なテーマをとりあげてきたことのあらわれとみることができる。これらの意見は、今後もテーマ設定などに活かす必要があろう。

研究会の改善点についてはTable 6に示した。時間配分については、時間が短いという意見や適切にしてほしいという意見が7件あった。また、参加者に発言の機会がほしいという声が同様に7件あった。時間配分と参加者の発言については、テーマによって柔軟に構成を変えるなどの工夫が必要と考えられる。

発表環境の改善については、プロジェクターの文字を大きくしてほしい、マイクの音声を大きくしてほしい、プロジェクターで示された資料も配布してほしいという意見があった。発表内容の改善については発表を整理してほしい、具体的な話しを聞きたい、会場への順路・案内については、（会場に至近の）南門を開けてほしい、地図がほしいという意見がよせられた。

(6) まとめ

幼児教育未来研究会の1年間の活動状況を総括した。本研究会は発足から3年目を迎え、研究会の認知度はその内容の質的水準によって一定の評価をえられていることが明らかとなった。

とはいえ、本研究会への期待の高さゆえにさらなるニーズに応えることも要請されている。例えば、幅広い年齢層や初任者から主任・園長といった保育経験による課題の相違、また時代や社会の変化によって新たに立ちあがる課題への対応など、多様なニーズが存在する。さらには保育所関係の参加者を拡大する工夫、都市部の公立幼稚園に特定化されたテーマの拡大、日々の実践と結びついたテーマの設定なども具体的に検討する必要がある。

引用文献

無藤隆・岩立京子・西坂小百合・高濱裕子.（2006).
大学と附属幼稚園と現場の関係を構築する：幼児教育未来研究会の試みを通して．お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要第3号,45-53.

付記

本論文の執筆分担は次の通りである。無藤隆（第Ⅰ部），森下葉子（第Ⅱ部の2．および3．の(1)(2)(3)），齋藤久美子（第Ⅱ部の3．の(4)(5)），高濱裕子（第Ⅱ部の1．および3．の(6)および要約と全体の調整）